

■ 神奈川県立図書館

横浜 〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋 3-27-1 TEL (045)481-5661(代表)
平塚 〒259-1293 平塚市土屋 2 9 4 6 TEL (0463)59-4111(代表)
<http://www.kanagawa-u.ac.jp/lib/index.html>

インターネット時代の 図書館

佐藤 睦朗

1998年6月から99年5月にかけて、当時大学院生だった筆者は、スウェーデン東中部にあるリンシェーピング大学に留学した。その間、ほぼ毎日のように大学図書館を利用したのであるが、そこではすでにインターネット時代に対応したサービスが本格的に開始されていた。具体的には、所蔵圖書の予約や所蔵されていない圖書の取り寄せ申し込みがインターネットを通じて可能となっていたのである。これにより、図書館のカウンターまで出かけなくても、パソコンの画面上で簡単に手続を済ませることができた。当時の日本ではここまでのオンライン化は進んでいなかったことから、こうした大学図書館における利便性は、IT産業の育成によって90年代前半のバブル崩壊後の不況から脱出したスウェーデンの先進性を示す事例であるように思われた。

だが、あれから5年ほどが経過した今日では、わが国でも図書館の整備が進み、上述のスウェーデンでの状況にほぼ追いついたといえよう。本学では、文献複写についてはすでにインターネットを通じて申し込むことが可能となっていたのであるが、この4月からはOPACが一段と改良され、現物貸借の申し込みもオンラインで可能となった。このような便利なサービスは、10年ほど前に院生として研究を始めた頃には想像すらできなかったことである。

それでは、今後大学の図書館に期待される機能

とは、どのようなものであろうか。この点について、日本よりも早い段階でIT化を推進したスウェーデンでの現状を手がかりとして考えてみたい。

スウェーデン王立図書館が提供するLIBRISという検索システムでは、著者名を入力すると、刊行図書だけでなく、国内で発行された学術雑誌や新聞に掲載された論文や書評も同時に一覧として表示される。これらの情報は、最新の研究動向や著書以外の過去の研究成果を把握するうえで貴重である。これに対して、わが国の代表的な図書検索システムである国立情報学研究所のWebcatでは、論文のデータベースとリンクされていないため、残念ながら著者別の論文一覧までは表示されない。こうした論文の情報も含めたデータベースの需要はわが国でもあると考えられることから、今後対象を論文や書評にまで拡大することが望まれる。このためには、各大学の図書館において学位論文や紀要に関するデータベースを作成し、それをオンラインで提供することが必要となる。

この問題との関連で指摘しておきたいのが、紀要の電子化である。スウェーデンでは、最新の研究レポートがWeb上で公開され、閲覧やダウンロードが可能となっている。これにより、以前は情報収集が容易ではなかった最新の研究の動向が海外でも簡単に入手できるようになった。遠く日本でスウェーデン史研究を行っている者にとって、この恩恵は計り知れない。こうした研究情報の発信を統括しているのは、多くの場合大学図書館である。日本においても一部の図書館や研究所で紀要のWeb上での公開が始められているが、まだ一般的な傾向にはなっていない。もっとも、紀要の電子化の方向に進んでいることは間違いなく、2002年からは国立情報学研究所によって紀要の電子化の事業が本格的に開始された。この事業は、将来的には各大学の図書館が公開したものを国立情報学研究所がリンクを貼るという方式に移行する計

画であるという。この場合、大学図書館は学内の紀要をWeb上で公開する業務を新たに担うことになる。

以上のように大学図書館は、従来の業務に加え

て、インターネット時代に対応するかたちで、学内の研究成果を外部に発信する場としての機能もはたすことになると思われる。

(経済学部助教授・西洋経済史)

図書館サービスの マーケティング

後藤 伸

人びとの生活をささえる技術基盤がおおきく、また急速に変わる時代には、文化に関わるさまざまな様相が交替していく。技術変化にともなうある生活様式の衰退は、それがたがいに支えあってきた他の生活様式の存続を難しくさせ、かくして一つの文化の消滅をみちびく。通常、生活様式のあるクラスターの衰退はそれに代わる新たなクラスターの導入と浸透をともなっている。だが問題は、それが新しい文化を作りあげるに十分な工夫や努力がなされているかということである。

デジタル化を推進する技術は、人びとの生活様式をおおきく、また急速に変化させている。ここでは知識の集積・保管場所とされてきた図書館との関わりでこの話題を取りあげたい。

かつて検索も保管も紙媒体にもっぱら依存していた時代、一冊の本を探し求めるには多大の労力と時間を要した。それもおおくの場合、所蔵していると思われる場所に実際にいってみなければ、求める資料があるかどうか確認の方法がなかった。デジタル技術は、この状況をおおきくかえた。少なくとも資料検索に関しては、様相は一変したといえる。一例だけをあげておきたい。筆者が長年にわたって追いつづけているイギリス海運企業の経営文書のおおくは、イギリスの国立海洋博物館の文書館に収められている。文書館ではその目録の詳細をタイプ印刷で、館内限りで閲覧に供して

いた。利用者はその目録を参考に文書請求するというシステムであった。それがつい最近、目録自体を海洋博物館のインターネット上のホームページですべて自由に閲覧可能となった。探し求めている資料があるかどうかの確認が、いまやインターネット上で容易にできるのである。もちろん、資料内容それ自体がデジタル化されて閲覧可能となっているわけではない。だが、企業情報公開ルールの整備とデジタル化の進展は近い将来、資料内容それ自体のインターネット上での閲覧を現実のものとするかもしれない。

著作や文書のすべてが電子媒体に移行するかどうかについて、素人の筆者には判断がつかない。しかし、紙媒体と電子媒体の行く末がどのようなものであれ、われわれ利用者が図書館に期待する役割は増えることはあっても、減ることはない。ここでは今後ますます期待される役割のうち、二つだけをあげておきたい。一つは、電子媒体の進展に図書館サービスが確実にフォローしていくことを望みたい。デジタル化はテキストだけではなく、画像、音声をも包みこむ形で進んでいる。将来、文字、画像、音声のデジタル処理と操作の融合が進めば、紙媒体の収集・保管を中心とした図書館のあり方は陳腐化する虞がある。デジタル技術の進展をつねにモニターしながら、マルチメディアに対応したサービスを適宜判断して取り入れていくことは、図書館が存在理由をもって機能を果たしていく上で重要であろう。またそのための継続的な学習が図書館員に求められている。

二つ目は、双方向での情報提供を付加価値として提供するシステムを構築してもらいたい。デジタル検索のマイナス面として、有用情報の選別が困難なこと、また検索の手法がかぎられていて周辺情報がすくいとれないことが指摘されている。この欠陥については、図書館側が図書検索者に対

して文献目録的な情報を提供できるようにすれば、ある程度補えるように思われる。すでに民間の出版社や取次店はインターネット上で、当該図書に関連した新聞紙上での書評や読者の読後感想文などが読めるサービスを提供している。大学の所蔵図書（電子媒体をふくむ）について、図書館員作

成のビブリオ、教職員・学生によるコメントや寸鉄、新聞・雑誌の書評などをハイパーリンクの形で参照できたなら、神奈川大学図書館の利用はもっとエキサイティングになるだろう。文化の形成に寄与しうる図書館サービスへの期待は大きい。

(経営学部教授・経営史)

電子図書館の機能と未来

木下 宏揚

近年、コンピュータおよびインターネットの普及により電子図書館が注目されている。図書館の基本的機能は、書籍の収集および分類所蔵、利用者に対する蔵書の提供、利用者が求める情報探索の支援、文献複写などがある。さらに電子図書館は、次のような機能を持っている。

知識情報コンテンツはデジタル書式で記録され、体系的に蓄積保管される。知識情報コンテンツに対して、いつでも、だれでも、どこからでも、アクセス可能となる。そのためにインターネットが使われる事が必須条件となる。知識情報コンテンツへのアクセス手段の使い勝手が良い。個人個人の役割や要求に応じて、必要とされる知識情報コンテンツにアクセス可能な制御が自然に行われる。

具体的なサービスおよびコンテンツの種類としては、著作権の保護期間が終了した著作物をデジタル化したもの、図書館あるいは図書館が所属する組織に著作権があるもの、有料の電子化雑誌記事・論文、電子ジャーナル、DVD、CDなどパッケージ系電子出版物、オンライン商業データベース、他機関のWWWサーバなどネットワーク情報資源へのリンクを集めたポータルサイトなどがある。

電子図書館で取り扱う情報には、対象となる情

報本体の1次情報とタイトル、著者、索引、あらまし、書評など1次情報に付随し、検索などの手がかりとなる2次情報がある。従来の紙媒体やアナログの音声や映像情報などは、そのままの形で2次情報のみデジタル化する場合と、1次情報を含めてデジタル化する場合がある。1次情報の電子化方法としては、書物の場合、人手によるもの、スキャナにより画像データに変換したもの、これをさらにOCR(Optical Character Reader)で符号化したテキスト情報に変換する方法などが考えられる。デジタル化した情報の蓄積媒体としては、ハードディスク、CD、DVDなどの光ディスク、磁気テープなどが考えられるが、取外しが可能なメディアは、読み出し装置を継続的に入手することが困難な場合が多く、1次的なバックアップや情報交換以外の用途には不向きである。現状ではハードディスクによるディスクアレイによる記録が容量、信頼性、スピード、継続性などにおいて優れていると考えられる。

非デジタル情報をデジタル化し、あるいはもともとデジタル化されている情報は、そのままの形では扱いにくいので、計算機で処理が容易な何らかの記述言語で表現する必要がある。現在このような目的で有力視されているのはXML(Extensible Markup Language)である。XMLではHTMLと同様にタグにより情報を構造化して記述するがHTMLではタグの意味が予め規定されているのに対して、XMLではタグの意味を定義可能で柔軟な記述が可能である。1次情報あるいは2次情報はXMLで記述されるが、これらの情報をデータベースとして構成し、さらにネットワークで有機的に結合し、情報検索や利用者や情報提供者の認証を行うためには、ディレクトリシステムが用い

られる。ディレクトリシステムとして現在もっとも普及しているものにLDAP (Light weight Directory Access Protocol) がある。利用者と電子図書館など情報提供者の間のインターフェースとしては、WWW(World Wide Web)が用いられる。WWWの基本は情報提供者から利用者への情報の転送であるが、CGI(Common Gateway Interface)により双方向の通信が可能となる。

今後、電子図書館がさらに普及していくために

は、電子図書館に蓄積する知識情報コンテンツの増大に対処する手法、インターネットを使用する事に関連する情報セキュリティ、知識情報コンテンツを蓄積・管理するデータベースの設計、効率良く目的の知識情報コンテンツにアクセス可能な検索システム、電子図書館どうしのネットワーク化、知識情報コンテンツの共有化などの課題を解決する必要がある。

(工学部教授・電気回路)

文献複写・現物貸借申込方法の変更について

4月1日より、図書館OPAC画面上の左側にあるボタンから、他館の図書の取り寄せ、文献複写の依頼がオンラインで利用できるようになりました。

- ①現物貸借申込ボタン 本学が所蔵していない図書の取り寄せの申し込み
- ②文献複写申込ボタン 本学が所蔵していない資料の文献複写の申し込み

このサービスは、本学図書館が所蔵していない資料の取り寄せや複写依頼を申し込むものです。図書館OPACを検索し、所蔵していないことを必ず確認したうえで、NACSIS-Webcat (OPAC画面上左側に入口を示すボタンがあります) を検索してください。ヒットした場合は、その資料データをもとに①または②のサービスを利用してください。NACSIS-Webcatでヒットしない場合は、図書館職員が調査いたしますので、できるだけ詳しい資料データを入力し申し込んでください。

なお、本人の利用状況を確認するためのオンラインサービスもあわせて開始いたします。

◆利用状況確認ボタン

本人の利用状況 (借りている図書の書名、冊数、返却期限、予約している図書の到着状況、他館からの図書、複写物の到着状況など)の確認

なお、これらの新しいオンラインサービスには、図書館蔵書目録(OPAC)検索画面専用の【ILL利用アカウント】が必要です。

横浜図書館2F、平塚図書室カウンターで交付しておりますので利用を希望する方は、カウンターまでお越しください。

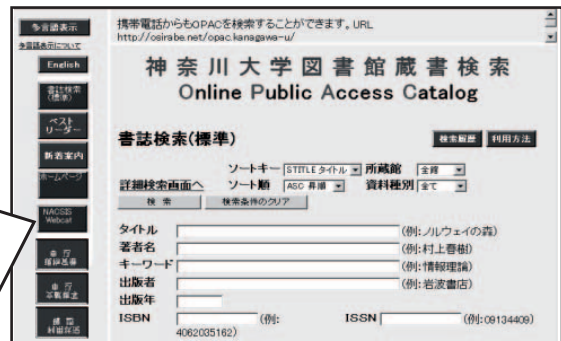
NACSIS Webcat

現物貸借
申込

文献複写
申込

利用状況
確認

図書館蔵書目録 (OPAC) 検索画面



『西洋哲学史—古代より現代に至る政治的・社会的諸条件との関連における哲学史—』上・中・下巻

バートランド・ラッセル著 市井三郎訳 みすず書房
B130.2-1~3-2 130-R89-1~3

『HISTORY OF WESTERN PHILOSOPHY and its Connection with Political and Social Circumstances from the Earliest Times to the Present Day』
Bertrand Russell George Allen & Unwin A133.1-129

田 口 勉

私は法学部で法学を熱心に勉強し、卒業はしましたが、法がどういうものなのか納得できていません。しばしば条文の解釈をめぐる学説が対立しますが、なぜ対立するのか。なぜある1つの学説が正解とされないのか、つまり、なぜいくつもの学説が対立したままなのか。このような欲求不満が、もう少し法学を勉強したい、大学院へ進学したいと思った大きな理由です。法学などの社会科学は、その起源は西洋にあります。西洋の法体系がわが国に導入されたのは明治維新以降のことですが、そのとき西洋の法学も一緒に取り入れられました。そのため、研究者を養成する大学院では、外国法を勉強することが一般的です。大学院進学後の私も、ドイツ法を研究しましたが、次第に西洋人の考える法あるいは正義と、日本人の考えるそれとは若干違うかもしれないと思うようになりました。

こうして、私の関心は、西洋人の考える法や正義は本来どのようなものなのか、に向かっていきました。その解決の鍵は、その基礎となるものの違い、すなわちキリスト教と哲学にあるのではないかと推測し、文献を読むなかで出会ったのが、本書です。ラッセルがアメリカの大学で行った哲学史の講義をまとめたものですが、それにもかかわらずと言ったら失礼でしょうか、哲学を専門としない私でも思わず読みふけてしまうほど面白い本です。私はすっかり本書の魅力にとりつかれてしまいました。論旨が明快であり、批判精神にあふれ、おそらくユーモアのセンスは天下一品でしょう。

たとえば、カントは、時間と空間が先天的に(アприオリに)絶対的であることを前提にその理論を組み立てましたが、ラッセルはアインシュタインの相対性理論を引き合いに出して、相対性理論によれば時間と空間といえども相対的である

から、カントの前提自体が間違っていると主張します。この部分を読んだ私は、まったく狐につままれてしまいました。大変風変わりな哲学論ですから。ラッセル流のユーモアかもしれないと思ったのはだいぶ後になってからのことです。彼の面目躍如といったところです。

次に、ヘーゲルがプロシヤの歴史を絶対的理念の現れと観た点に関して、ラッセルは西洋の、しかも地中海近辺の地域で起こったことがどうして絶対的理念の発現といえるのか、と反駁しています。ラッセルがイギリス人であることからの反発もあるかもしれませんが、東洋人としても共感することができますし、本書のタイトルが「西洋」哲学史であることは、ラッセルの示した見識であるように思いました。あるいは私の深読みにすぎないかもしれませんが。

本書の魅力は、まずもって、「哲学する」ことの楽しさを教えてくれる点にあると思います。単に知識を得ることは決して「哲学する」ことではなく、考えることこそが重要ですが、そのことはわかってもなかなか実行できないものです。その点、ラッセルは徹底的に哲学しており、それが本書を生き生きとした魅力的なものにしています。ラッセルのように、だれも疑わない前提自体を疑うことの重要性は今日でもいささかも失われてはいません。むしろこれによってこそ学問は発展するのだということを本書は教えてくれます。

しかし、本書によっても、最初に述べた私の疑問が全面的に解決したわけではありませんが、西洋人のものの考え方に少しはなじめたように思います。日本人が西洋の学問の本質を知るために、西洋の哲学はその重要な基礎を与えてくれることはほぼ間違いありません。そのために本書は最もおすすめることのできる一冊です。

(法学部教授・民法)

『特命全権大使米欧回覧実記』(一)～(五)

久米邦武著 田中彰校注 岩波文庫(横浜)・宗高書房(平塚)

B081-731.A~E-41 319.1-25-1~5

小 國 力

筆者が大学を卒業した40数年前は大学にはコンピュータもなく、コンピュータという名も知らなかった。数学科を出て電機会社の情報処理部門に勤めたが、そこで使用したのはIBM社のパンチ・カード・システムという30年以上も前に姿を消した機械だった。この電機会社がコンピュータを製作販売するようになってソフトウェア部門に移され、それからコンピュータの歩みとともに40年近くを過ごした。いわば無から現代のインターネット時代まで生きてきたわけである。

10数年前、本学に勤めるようになってしばらくのあと、幕末から明治にかけて同じように無から西欧諸国に必死に追いつこうとした人たちに關心をもつようになった。調べはじめたころ、いちばん印象の深かったのが「米欧回覧実記」である。5分冊に分かれているので、一冊といえるかどうか怪しいし、明治初期の美文調で書かれているため、若い学生諸君にとってはややとっつきづらいかもかもしれないが、内容はたいへん示唆に富んでおり、少なくとも最初の1分冊は読む価値があると思う。

この本は、まだ混乱期の最中にあった明治4年11月から6年9月にわたって欧米を訪ねた岩倉具視使節団(平均年齢数えで30歳)の公式記録である。使節団は、右大臣の岩倉(47歳)を全権大使に、木戸孝允(桂小五郎、39)、大久保利通(42)、伊藤博文(31)、山口尚芳(33)を副使とし、書記官・随員ならびに諸省の理事官あわせて48人からなっていた。これに、女子留学生5名をふくむ留学生が59人途中まで同行し、津田塾の創始者津田梅子は8歳で留学生となっていた。書記官は外国語や外国事情に明るい旧幕臣が多く、理事官は薩長土肥出身者がほとんどである。理事官たちは海外に暗く、政権をとるまでは攘夷思想に凝り固まっ

ていた者もいた。留学生のうちには、中江兆民やのちの三井財閥の総帥となった岡琢磨(MIT留学)などがいた。編者の久米(当時33)は佐賀藩出身の旧藩士で、蘭癖大名として有名な藩主鍋島直正の信任厚かった儒家であり、晩年には同郷の大隈重信が創設した東京専門学校・早稲田大学で歴史学を教えた人である。

この使節団に随行してはじめて欧米に出かけた人たちは欧米の技術や社会制度に感銘を受け、一方的な排外主義の過ちを悟った。数年後に起きた萩の乱や西南戦争での江藤新平や西郷隆盛が武士階級の衰亡を防ごうと自滅することになったのは、欧米を見る機会を逸したことも一因であろう。事実、この本に書かれた内容は社会だけをとり、病院・教育機関・孤児院から監獄まで並みの調査団や旅行客では手の届かないところまで詳細に調べ上げている。また、工部卿の伊藤博文は若いころ井上馨や、国内の技術教育制度確立に寄与した山尾庸三らとともに半年間英国に密留学しており、使節団での彼の目的の一つは欧米のすぐれた科学技術者の招聘にあった。同行した理事官のなかには、のちにわが国の衛生制度と医師資格制度を確立した長与専斉もいて、各国の医学教育制度の調査を担当し、その課程で先進国の衛生制度を調べ上げている。

使節団の最大の目的の一つは、不平等条約の修正交渉であったが、その他にも各国の政治・経済・社会・教育・工業など多岐にわたる見学調査をかねた。したがって、この本には各国の地勢、気候をふくむあらゆることがふれてあり、若い人が社会に出て世界に勇躍したときに何をどのように見るかの参考になろう。しかも、文章力が年々乏しくなっていく時代なので、手本として読むこともためになろう。(理学部教授・応用ソフトウェア)

『長倉文庫記』

上海水産大学図書館長 張 健



撮影
徐謙

日差しが長倉文庫の閲覧室に暖かく差し込み、深紅色の書棚が静かな光沢を放っている。閲覧室は静まり返って、壁際の飾り棚の中には長倉先生の生前の写真、数冊の著作が置かれ、色鮮やかで美しい神奈川大学から贈られた記念品が二つある。閲覧室の通路の向かいには、長倉文庫の書庫があり、書架には日本から海を越えてきた幾千冊の図書 日本神奈川大学が寄贈した、長倉保先生の蔵書 が整然と並んでいる。これが『長倉文庫』である。

写真上の長倉先生の眼はきらきら輝き、まるで目の前の全てをつぶさに見ているかのようなのである。長倉先生、喜びと安心を感じられていますか？先生の蔵書がどのようにして上海水産大学と縁を結んだのかご存知ですか？先生の奥様、ご同僚、面識あるご友人、面識なきご友人、日本と上海水産大学のご友人を含めて彼らが長倉文庫の創設のために行った全てをご存知ですか？私は長倉先生が必ずや非常に喜ばれ安心しているものと思います。なぜなら長倉文庫の創設過程において、誰であれ長倉文庫と少しでも関係のあった者は皆、自ら為すべきことに全力を捧げたからです。まさに皆が心を合わせて協力し困難を克服したことにより、2003年11月に長倉文庫の落成を宣することになりました。

長倉文庫によって、我々の多くが見知らぬ仲からよく知る仲へ、よく知る仲から親しき友になり、

最後には古くからの友になったかのようなのです。2002年初頭、寄贈についての意向がまとまった後、長倉夫人とご家族及び神奈川大学は上海水産大学との間に頻繁な相互訪問を開始し、共に長倉文庫の創設のため尽力しました。2002年5月、上海水産大学は担当者を派遣し寄贈書を受け取りました。11月には、上海水産大学創立90周年記念行事に、長倉夫人とご家族を招待いたしました。昨年2月には、神奈川大学図書館の吉井館長、高橋事務部長が上海水産大学図書館を訪問され、蔵書の整理、保存について検討を行いました。そして、神奈川大学国際交流センターの高橋所長、田中課長、図書館の吉井館長、高橋事務部長、長倉夫人等のご一行が、昨年11月29日に上海水産大学を訪問し長倉文庫の落成式に出席したのです。この間に、長倉文庫は我々の努力の中で無から有になり創設に至りました。あのSARSですら、我々の歩みを止めることはできなかったのです。

長倉文庫は、上海水産大学図書館の利用者に幸運の一つ増やしました。上海水産大学図書館は中国国内において水産科学技術文献に関する収蔵の歴史が最も長く、専門資料が最も整う図書館として、水産界から水産科学文献の情報センターと見なされてきました。長倉文庫の創設は上海水産大学図書館の特色ある蔵書にまた一つ輝きを添えたのです。利用者は長倉文庫を寄贈し、創設した人々に感謝するでしょう。なぜなら、これらの蔵書が日本社会経済史、日本農業史、中日文化交流史を研究する者及び日本語学習者に対し有用な参考資料となるからです。

長倉文庫は活気溢れる上海水産大学学海路新キャンパスに居場所を定めました。長倉文庫は新キャンパスと共に上海水産大学というこの100年の伝統をもつ大学の新たな発展の証人となるでしょう。異なる民族、異なる国の文化を相互に受け入れ、影響を与え、発展することを通じて、社会の進歩はよりよく推進されるであろうと我々は信じます。

(国際交流センター 平田直子訳)

図書館展示コーナー

『名著復刻全集』 に見る近代文学]

展示期間 4月1日～6月30日

今回は、明治から大正・昭和初期までの日本の文学に、改めて親しんでもらおうという企画です。古いようで、その主題には現代にも通じる鋭い視点が含まれています。

展示コーナーでは、時代色がある[名著復刻全集]と[複製近代文学手稿100選]の中から、親しみやすい作品をピックアップし展示しました。美しい装丁をより深く鑑賞していただくこと、時代別の異なった装丁技法なども紹介しています。また、出だしの文章がよく知

られている[雪国]と[吾が輩は猫である]に関して、英訳された書物を一緒に展示しました。英語に興味をお持ちの方、そうでない方も、日本語表現と英語表現のニュアンスの違いを楽しんでいただけるのではないのでしょうか。

近代文学の世界へ…出会い、再会を求めて、是非一度ご鑑賞ください。



図書館の利用案内

1. 春季長期貸出の返却について

春季長期貸出期限日は4月10日(土)です。

延滞しますと、延滞日数分(最長2週間)が貸出禁止になりますので、ご注意ください。

2. 新入生対象図書館利用ガイダンス

新入生のために図書館利用ガイダンスを4月12日(月)から行います。詳細については掲示および図書館ホームページに掲載します。

3. アカウントの取得について

図書館の端末を利用するには情報化推進本部発行のアカウントが必要です。取得していない方はMNSカウンター(横浜キャンパス:23号館1階、6号館2階、平塚キャンパス:61号館1階)でアカウントの交付を受けてください。

4. 他機関への文献複写依頼の方法が変わります。

ILLシステム移行に伴い、ILL専用のアカウントが必要です。事前に図書館2階のレファレンスカウンターに申し込んでください。詳細については4ページおよび図書館ホームページをご覧ください。

5. データベースセミナーの実施について

5月から図書館2階情報リテラシーセミナー室でデータベースセミナーを実施する予定です。図書館が契約しているデータベースの使い方等のガイダンスを行います。詳細については掲示および図書館ホームページでお知らせします。

夢 現実 ゆめとうつつ

人は自分の意志を伝えるために言葉を使う。一度に大量の情報を伝えるために活字を発明し、印刷技術を利用した。無線技術や電話、ファックス、電子メールは距離と時間を極限まで短縮した。しかし、文明の恩恵は人に退廃をもたらすことがある。五感を鈍麻させ、品位を軽んじ、生命の喜びを忘れさせる。流行病に罹った家畜を、防疫という名のもとに、何万も大量虐殺する光景はおぞましい。食用の家畜であっても、生命の尊さに変わりはないはずだ。年間3万人もの自殺者の亡霊がこの国を被い、母が子を殺す。なんと生命の軽いことか。これからは詩を読もう。夜空に星を眺めよう。木々の緑と水面に映る雲に心を動かそう。豊かで澄んだ知性、繊細な感情、美しい言葉があればいい。(空蝉)